

# 目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高める国語科学習指導の工夫 — 「推敲」の過程における学習の充実を通して —

安芸高田市立川根小学校 佐々木 加奈子

## 研究の要約

本研究は、「推敲」の過程における学習の充実を通して、目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高める国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力」を、「自分が伝えようとすることを明確にし、それが相手に伝わるようにすることを意識して、言葉の用い方や語や文のつながりの妥当性について検討し、試行錯誤しながら意図をもって表現を選択して書き表す力」とした。この力を育成するために、「書くこと」における「推敲」の過程に焦点を当て、「立ち戻りシート」を活用した学習や、表現するための語彙を広げる学習を取り入れ、目的や相手を意識して、書き表し方の問題点を見だし、試行錯誤しながら自分の文章を仕上げていくという学習活動を行った結果、相手や目的を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高めることができた。

## I 主題設定の理由

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）では、「学びを通じた子供たちの真の理解、深い理解を促すためには、主題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行い、目の前の問題に対しては、これまでに獲得した知識や技能だけでは必ずしも十分ではないという問題意識を生じさせ、必要となる知識や技能を獲得し、さらに試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を行い、その上で自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげるという、深い学習のプロセスが重要である。」<sup>1)</sup>と述べられている。このことは、広島県が示している、児童が自ら課題を見付け、その解決に向けて探究的な活動をしていく「課題発見・解決学習」にも通じることである。

平成31年度（令和元年度）「全国学力・学習状況調査」の調査結果において、「相手に分かりやすく情報を伝えるための記述の工夫を捉えたり、目的や意図に応じて自分の考えの理由を明確にし、まとめて書いたりすることに課題がある。」<sup>2)</sup>と示された。これは「考えの形成、記述」の過程における課題であるが、書き表し方を客観的に見直す「推敲」の過程にも関わりが深いと考える。

所属校の児童がこれまでの学習で書いた文章を見ると、目的や相手を意識して、的確な書き表し方がされていない、状況や心情などを読み手に具体的に想像させるような書き表し方がされていないなどの

実態が目立つ。また、児童が自分の文章を読み返して問題点に気付いたり、よりよくしようと吟味・工夫したりすることはできておらず、文章をよりよくすることに対する児童自身の課題意識も低い。

自身の指導において、「書くこと」の学習では、作品を書き上げることに重きを置き、「推敲」の過程は指導者の添削になってしまうことも多く、児童に自分で書き表し方を吟味・工夫する機会を十分与えているとはいえない。また、単元の導入部分では児童に書く目的や相手を明確にさせるものの、単元を通して意識させ続けることができていないという課題もある。

これらのことから、目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高めるために、文章を仕上げる最終段階である「推敲」の過程における学習を充実させ、書き手である児童が目的や相手を意識しながら自分で文章を読み返し、問題点に気づき、試行錯誤しながら主体的に次の学びにつなげることができる学習を目指し、本主題を設定する。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 目的や相手を意識して書くことの必要性

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成30年、以下「29年解説」とする。）において「B 書くこと」は「題材の設定、情報の収集、内

容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」「共有」の学習過程で構成されている<sup>(1)</sup>。

「29年解説」では、相手や目的を意識することについて、何のために書くのか、読み手はどのようなことを知りたいのかなど、相手や目的を念頭に置くことであると述べている<sup>(2)</sup>。さらに、相手や目的を意識することは「題材の設定、情報の収集、内容の検討」以外に「考えの形成、記述」「推敲」の過程においても重要なものであると述べている<sup>(3)</sup>。

村上ひとみ（平成4年）は、目的意識、相手意識を明確にすることが、「書こうとする作品の仕上がりや、それをどう活用するかという見通しをもたせる」<sup>3)</sup>「取材・構成・記述・推敲の各段階で『立ち戻り』という思考が働く。その際、文章表現の全過程を通じて、『立ち戻り』のよりどころとなる」<sup>4)</sup>と述べている。「立ち戻り」について、岸本憲一良（2013）は、「『書き手が伝えたいこと』と『読み手に伝えること』とは、ズレが生じる場合の方が多い。であるからこそ、『書き手』はそのことを認識し、絶えず自己内に想定した『読み手』と対話をしながら活動を進めていく必要がある。」<sup>5)</sup>と述べている。これらのことから、目的や相手を意識させることは、「書くこと」の全ての学習過程において見通しをもたせることにつながり、読み手との間のズレについて立ち戻って考えるよりどころにもなるといえる。

目的意識、相手意識については、木下美和子（2005）が、相手を分析的に捉えることで、適切な表現技法や技術などを選択する必要性が生まれることを述べている<sup>(4)</sup>。また、難波博孝（2006）は、学習者に伝えたい相手や目的がある時、児童は真剣に悩み、書くことの具体的な技能を求めることを述べている<sup>(5)</sup>。つまり、目的や相手を意識することは、よりよい表現を探究していくための必要感になるといえる。

これらのことから、目的や相手に立ち戻ることが、目的や相手にふさわしい言葉の使い方や表現の仕方を考えたり、よりよいものを判断し書き表したりすることにつながっていくと考える。

## 2 目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力について

### (1) 目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力とは

目的や相手を意識して、それらにふさわしい言葉の使い方や表現の仕方を考えるためには、自分の表現の問題点について立ち止まって検討する、吟味の段階が必要となる。

阿部昇（2008）は、「語彙・表現の妥当性、事実提示の妥当性、事実選択の妥当性、解釈の妥当性、語彙相互・解釈相互の関係についての妥当性一等を吟味（評価・批判）する力を子どもたちに付けていく必要がある。」<sup>6)</sup>と述べており、言語の吟味・検討を前面に出した学びの必要性を述べている。また、鈴木隆司（2015）は、正確さや論理整合性といった客観的な表現方法と、表現のふさわしさ、語彙の選択といった、文学的・感情的な表現方法の両面の吟味の必要性を述べている<sup>(6)</sup>。これらのことから、客観的な表現方法と文学的・感情的な表現方法の両面から、言葉や表現の妥当性を吟味することが求められているといえる。

そして、表現を吟味することが、意図をもって判断、選択し書き表していく工夫の段階につながると考える。「29年解説」に、「書き表し方を工夫するとは、自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか（文末表現、敬体か常体か等を含む。）、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して記述の仕方を工夫することである。」<sup>7)</sup>と述べられている。

つまり、書き表し方を工夫するためには、何度も目的や相手に立ち戻り、自分の表現を見直し、問題点について吟味した上で、よりよい表現を求め試行錯誤していくことが重要であると考え（図1）。

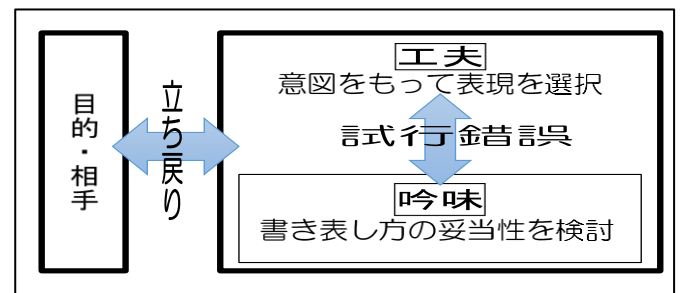


図1 目的・相手と書き表し方の吟味・工夫の関係

以上を踏まえて、「目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力」とは、「自分が伝えようとすることを明確にし、それが相手に伝わるようにすることを意識して、言葉の使い方や語や文のつながりの妥当性について検討し、試行錯誤しながら意図をもって表現を選択して書き表す力」とする。

### (2) 目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する学習過程

書き表し方を吟味・工夫することについて、田中宏幸（2001）、大内善一（2009）、森田香緒里（2015）が述べていることを、次頁の表1に示す。

表1 書き表し方の吟味・工夫について

田中宏幸 <sup>(7)</sup>	大内善一 <sup>(8)</sup>	森田香緒里 <sup>(9)</sup>
文章を書く過程で、よりの確な表現を求め、幾度も読み返して、訂正したり書き直したりする作業	自分の書いた文章を客観的に見直し、伝えようとする事実や用件・意見などが十分に書き表されているかどうかを検討すること	書き手が自身の文章を課題状況（目的や相手等）やテーマに応じて、よりの確な表現を目指し吟味・修正する作業

学習過程の側面から見てみると、田中は主に「考えの形成、記述」について、大内は「推敲」について述べ、森田はどちらにも関わることとして述べている。このことから、書き表し方を吟味・工夫する力は、「考えの形成、記述」と「推敲」に大きく関わるものであると考えられる。

「29年解説」に示されている「考えの形成、記述」「推敲」の学習過程における指導事項を表2に示す。

表2 「考えの形成、記述」「推敲」の指導事項<sup>8)</sup>

	考えの形成、記述	推敲
第1学年及び第2学年	語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること。	文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。
第3学年及び第4学年	自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。	間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えること。
第5学年及び第6学年	目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。	文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。

「推敲」の過程の指導事項を見ると、「考えの形成、記述」の過程の「書き表し方の工夫」について確かめたり整えたりすることが示されている。つまり、「推敲」の過程では、書き表し方について客観的に見直すことが求められているといえる。

さらに、「推敲」の過程の学習については、宮下昭廣（1990）が、「自分の作文の問題点を発見し、よりよい作文に書き改めていく推敲の活動は、作文の学習の中でも重要な表現活動の一つである。」<sup>9)</sup>と述べている。また、大内善一（2009）は、「推敲の学習の意義は、書き表された文章を客観的に見直すことで、書き手の思考を一層緻密にしていくところ

にある。」<sup>10)</sup>と述べている。つまり、文章全体を見直す「推敲」の過程の学習は、記述中に気付かなかった問題点に新たに気付いたり、細かな部分まで再考したりすることにつながるといえる。

さらに、目的や相手を意識して書き表し方を吟味・工夫するためには、「考えの形成、記述」「推敲」の過程での立ち戻りが特に必要となる。「考えの形成、記述」の過程では、書きつつ読み返す中で立ち戻りをしながら吟味・工夫することが中心となる。一方、「推敲」の過程は、それまでの学習活動全体を振り返る最終段階として重要な位置付けである。そのため、目的や相手を立ち戻りのよりどころとしながら、それまでの学習過程で作成した自らの文章全体を客観視し、吟味・工夫することとなる（図2）。

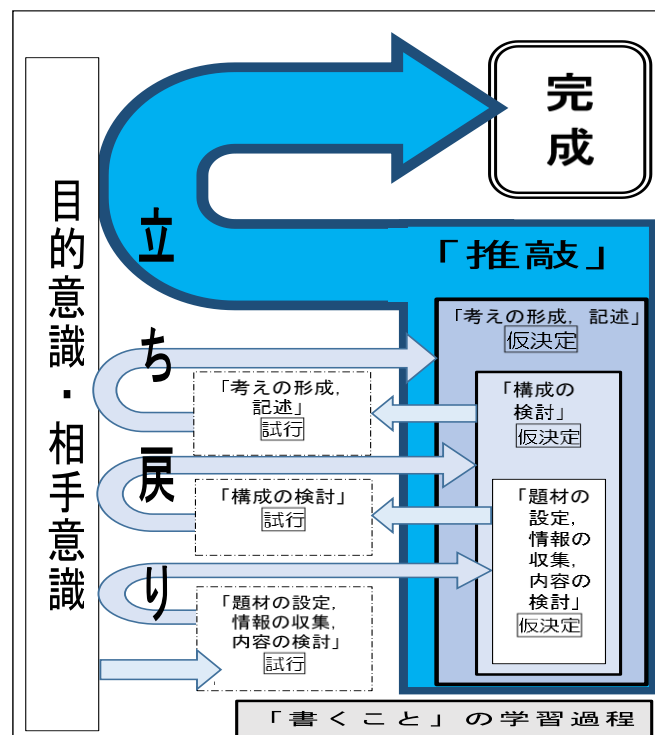


図2 「書くこと」における立ち戻りの思考イメージ

以上のことから、文章を仕上げる最終段階の「推敲」の過程で、文章に向き合い、よりよい表現を求め文章全体を磨いていくことが、目的や相手を意識して書き表し方を吟味・工夫する力を高めるために有効であると考えられる。よって、本研究では、「推敲」の過程に重点を置いて研究を行うこととする。

### 3 「推敲」の過程における学習の充実について (1) 「立ち戻りシート」の活用

石丸憲一（2013）は「とりあえず原稿用紙を埋めるために書くのではなく、自分の思いを文章で表現

するために、どのように書き表したらよいかにこだわれる児童・生徒を育てていきたい。」<sup>11)</sup>と述べている。さらに、青木伸生(2016)は、これからの授業について、一人一人が問題意識をもち、その解決に向かって試行錯誤を繰り返し、解決の糸口や方向性を子供自らが求めていくスタイルが求められると述べている<sup>(10)</sup>。石丸の主張する、思いを表現するために書き表し方にこだわる子供の姿にしていくなめには、青木の主張する、自ら問題点に気付き、試行錯誤しながら主体的に次の学びにつなげるという授業スタイルの実践が必要であると考え。そのためには、「推敲」の過程において、児童が自ら文章の問題点に気付き、試行錯誤しながら意図的に書き直していくことが不可欠である。そこで、本研究では「推敲」の過程において「立ち戻りシート」を活用させる(図3)。児童はこのシートに記入しながら、何度も目的や相手に立ち戻る。また、このシートは客観的表現、文学的・感情的表現の両面の吟味・工夫に使うことができる。児童が目的や相手に立ち戻って文章全体を吟味し、問題点を見だし、意図をもって表現を選択していくことをねらう。

## (2) 交流を取り入れた吟味・工夫について

記述したものを交流することについて、岩間正則(2010)は、内容についての考え方が深められるだけでなく、記述の仕方についても参考にすることができると述べ<sup>(11)</sup>、岸本(2013)は「自身で気付かなかった点に気付いたり、よき助言を得たりする可能性がある。」<sup>(12)</sup>と述べている。また、森田香緒里(2015)も、他者に表現意図を説明し、交流する必要性を述べていることから、交流して互いに吟味する活動は有効であると考え<sup>(12)</sup>。

しかし、児童の作文を互いに見直すことについて、大内(2009)は「書き手の意図を踏みにじって、単なるあら探しの作業となっている場合が少なくなる。」<sup>(13)</sup>と述べ、石井佐久馬(1987)は「せっかく書いた作文を、みんなに批判ばかりされることは書き手として堪えがたいことである。」<sup>(14)</sup>と述べている。記述したものを互いに吟味し合う交流するためには配慮が必要である。

そこで、互いの文章のあら探しにさせないために、教師の作成した文章を使って学級全体で吟味・工夫させることで、書き表し方の問題点に気付かせるとともに、工夫のための視点をもたせる。また、グループで互いにアイディアを出させ、自分の書き表し方を吟味・工夫する際の参考にさせる。交流の際は、書き手に工夫したいところを表明させ、周りはその思いを受け止めたうえで、目的や相手のことを考えてよりよいものにしていく活動であることを全体で確認することで、児童への意識付けとする。

## (3) 表現するための語彙を広げる学習

森田信義(1981)は、記述について「書き手の思考や感動を、その情理にしたがって、書き手の獲得している文字・語彙・文法等を駆使して書き表すこと。」<sup>(15)</sup>と述べている。つまり、書き手が表現するための文字・語彙・文法等を獲得していることが必要であるといえる。文章を書く上での語彙について、高津忠行(1986)は、「豊かな表現をさせるためには、豊かな語彙が必要である。しかもその語彙は表現しようとする事柄とよくあった語彙でなくてはならない。」<sup>(16)</sup>と述べ、小林一貴(2015)は、文章を書く上で用いる具体的な言葉とその使い方について考える機会の必要性を述べている<sup>(13)</sup>。また、井上一郎

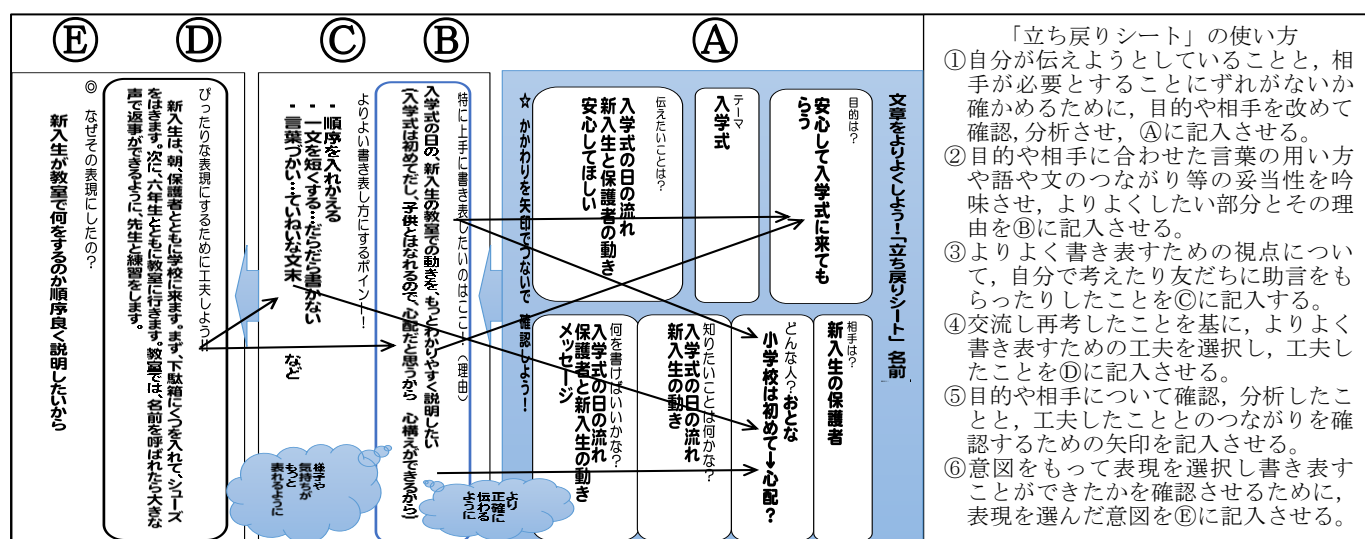


図3 「立ち戻りシート」の例と使い方



(2006) は、子供たちへの語彙の例示が大切であると述べている<sup>(14)</sup>。

適切な表現をするためには、多様な表現を知ることが不可欠である。「書くこと」の学習過程において、どのような語や文を使ってどのように書き表すかということは、書く内容の質と同様に重視されるべきものであると考える。そこで本研究では、単元を通して、帯時間を利用し、学習内容と関連する言葉集めや本の紹介等の語彙を広げる学習をすることで、児童が自分の書き表し方の吟味・工夫の際に活用できるようにする。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

研究の仮説及び検証の視点と方法を表 3 に示す。

表 3 研究の仮説及び検証の視点と方法

研究の仮説		
「書くこと」の学習過程において、「立ち戻りシート」を活用した学習や、語彙を広げる学習を行うことで「推敲」の過程の充実を図れば、目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高めることができるであろう。		
	検証の視点	方法
1	○目的や相手を意識して言葉の用い方や語や文のつながり等の妥当性を吟味し、意図をもって表現を選択し書き表すことができたか。	プレテスト ポストテスト 作文 事前・事後アンケート
2	○「推敲」の過程における学習の充実のための工夫は、書き表し方を吟味・工夫する力を高めるための手立てとして有効であったか。	立ち戻りシート 作文 振り返り

Ⅳ 研究授業の内容及び指導計画

研究授業の内容及び指導計画を表 4 に示す。

表 4 研究授業の内容及び指導計画

期間	令和元年12月 2 日～令和元年12月17日	
対象	所属校第 5 学年（1 学級 7 人）	
単元名	たった一人の新入生とその家族に川根小を紹介しよう	
目標	文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えることができる。	
時	学習内容	学習過程
1	学習内容、単元のゴールを確認する。目的や相手に応じたテーマを決める。	題材の設定、情報の収集、内容の検討
2	必要な情報を収集し、整理する。	構成の検討
3	文章の構成を考え、保護者に向けた文章を書く。	考えの形成、記述
4 5	共通の文章について「立ち戻りシート」を使って全体で吟味・工夫する。	推敲
6	目的や相手を改めて確認、分析しながら自分の作文を見直す。互いに助言し合ったことを基に、文章を吟味・工夫する。	
7	保護者に向けた紹介文を書き直す。	
8 9	新入生に向けた紹介文に書き直す。	
10	書いた文章を交流する。	共有

※ 単元を通して、帯時間に語彙を広げる学習を行う。

Ⅴ 研究授業の分析と考察

1 目的や相手を意識して言葉の用い方や語や文のつながり等の妥当性を吟味し、意図をもって表現を選択して書き表すことができたか。

(1) プレテスト・ポストテストによる分析

プレテスト、ポストテストでは、目的や相手を意識して文章を吟味・工夫し、意図的に直すことができたかを検証する問題を作成した。文章から問題点を見付け、客観的表現（正確さや論理整合性）と文学的・感情的表現（表現のふさわしさ、語彙の選択）の両面から加筆修正し答えるものである（表 5）。

表 5 プレテストとポストテストの内容及び評価基準

	プレテスト	ポストテスト
客観的表現	順序、文末、一文の長さ、不要な文などの問題点を含む文章を書き直すもの	炭焼き合宿でお世話になった地域の方に学んだことを報告する文章
	市内小学校の児童会の人に委員会の朝の放送について紹介する文章	
文学的・感情的表現	一年生に向けたお礼の手紙で、「うれしかった」という気持ちがより伝わるように工夫するもの	花田植えの本番に「どきどきした」という気持ちを、文集を読む人に、より伝わるように工夫するもの
評価基準		
A…目的や相手を意識して、内容を適切に書き直しており、その意図も明確に書けている。 B…意図の説明は明確ではないが、目的や相手を意識して内容を適切に書き直している。 C…書き直しが適切ではない。文章を直せていない。		

プレテスト、ポストテストの結果を表 6 に示す。

表 6 プレテスト・ポストテストの結果（N＝7）

客観的表現	ポストテスト				計 (人)	
		A	B	C		
	プレ テス ト	A	1 (児童 b)	0	0	1
		B	3	0	0	3
		C	3 (児童 a)	0	0	3
計 (人)		7	0	0	7	
文学的・感情的表現	ポストテスト				計 (人)	
		A	B	C		
	プレ テス ト	A	0	0	0	0
		B	4	0	0	4
		C	3 (児童 a)	0	0	3
計 (人)		7	0	0	7	

客観的表現、文学的・感情的表現ともに、ポストテストでは全員が A 評価で、児童が目的や相手を意識しながら書き表し方を工夫できたことが分かる。

児童 a は、プレテストでは、客観的表現、文学的・感情的表現ともに書き直した意図が明確でなく、誤字脱字も目立ち、文章が整っていなかったが、ポストテストでは「学んだことを報告する」という目的を意識して不要な文を削除し、相手が大人であることを意識して、失礼のないように文末を直しており、

その意図も記述していた。児童bは、客観的表現を見るプレテストでも目的や相手を意識した意図の記述があったが、ポストテストでは順序や文末表現等を整えるだけでなく、自分なりに文章を付け足して、より相手に分かりやすく伝わるよう工夫した記述が見られ、質的に向上していた。

(2) 児童の作文より

それぞれの作文について、記述直後に児童にそれぞれまでどおり見直しをして書き直させたものと、本稿Ⅱ3で示した本研究での手立てを組み入れた研究授業の後に書き直させたものとを比較した。記述直後に見直しをさせたものを見ると、どの児童も漢字や誤字・脱字の直しにとどまり、中には最後まで直していない児童もいた。しかし、授業を経て見直しをさせたものは、全て目的や相手を意識して意図的に書き表し方を工夫した形跡が見られた。

児童cは、プレテストで客観的表現、文学的・感情的表現のいずれにおいてもC評価であり、事前アンケートで「見直しに自信がない」と書いていた。記述直後の見直しでは冒頭の平仮名表記を漢字表記に直していたが、その後は手を付けておらず、口頭で尋ねると「どう直していいかわからない」と答えた。その後、手立てを踏まえた授業を経て児童cが直した作文を図4に示す。

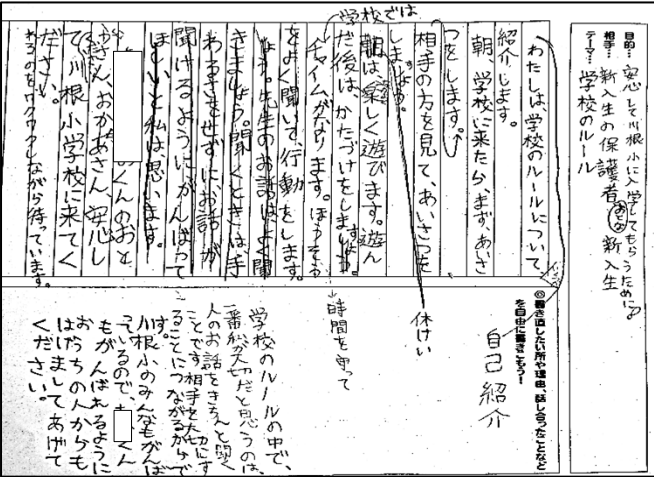


図4 授業を経た後の児童cの見直し

新入生の保護者向けに文末表現を直し、自分の気持ちを「ワクワクしながら待っています」と、相手が安心できるように書き表し方を工夫している。また、自分が一番伝えたい部分についても相手を意識した文面に書き直しており、意図的に工夫していることが分かる。事後アンケートにも、目的や相手を意識して書こうとしている記述が見られた。

これらの結果から、児童は学習を通して、自分が

記述した文章について、言葉の使い方や語や文のつながり等の妥当性を吟味し、意図をもって表現を選択して書き表すことができたといえる。

(3) 事前・事後アンケートの分析

事前・事後アンケートの結果を表7に示す。

表7 事前・事後アンケート結果 (N=7)

質問項目	肯定的回答 (人)	
	事前	事後
1 文章を書いた後に見直しをしたか	5	7
2 目的や相手に合わせて内容を見直したか	5	7
3 目的や相手に合わせて言葉遣いや文末を確かめたか	3	7
4 目的や相手に合わせて語や文の順序を確かめたか	5	7
5 表現の妥当性について吟味をしたか	4	7
6 よりよく表現するための工夫をしたか	4	7
7 友だちの文章に対するアイディアを出したか	6	7
8 意図をもった表現の工夫をしたか	2	7

文章の見直しに対する事後アンケートでは、全員に意識の高まりが見られた。特に、意図をもって表現を工夫することに対する意識の高まりが見られる。また、アンケートの記述欄には、文章をよりよくするために大切なこととして、「目的や相手のことを考えること」を挙げた児童が事前は7名中1名だったのに対し、事後では6名に増えている。残り1名の児童は、「立ち戻りシート」や最終的な書き直しにおいて目的や相手を意識した記述が見られたことから、全児童に目的や相手を意識して書き表し方を吟味・工夫する意識の向上が見られたといえる。事前アンケートで半数以上が「見直しをしている」と回答しているが、これまで児童は見直しは間違いを正すことと捉え、何をどのように直すとよいのかが曖昧で、意図的に工夫することは考えていなかったと思われる。これらの結果から、児童は学習を経て、目的や相手に立ち戻ってよりよい書き表し方になるよう見直そうとする意識に変容したと考える。

2 「推敲」の過程における学習の充実のための工夫は、書き表し方を吟味・工夫する力を高めるための手立てとして有効であったか。

(1) 「立ち戻りシート」を活用した授業より

ア モデル作文を使った吟味・工夫

「推敲」の過程で、「立ち戻りシート」を使いながら教師の作成したモデル作文を全体で吟味した。この作文は、客観的表現、文学的・感情的表現の両面の問題点を含んでおり、一時間ごとに、客観的表現、文学的・感情的表現に焦点を当てて吟味・工夫

をした。「立ち戻りシート」で、改めて目的を確認し、相手の状況をより細かく分析しながら文章の問題点を見付け、解決方法について話し合い、工夫する視点を見いだしていった。児童の振り返りを示す。

- ・見直しは間違い字だけでなく、目的や相手に対して本当にそれでいいかを見ていくことを学びました。
- ・目的や相手に合わせて、もっと気持ちが伝わる文章に書き直しました。みんなで意見を出し合っ、文章がすごくよくなったので、次は自分の文章をよくしていきたいです。

#### 授業後の児童の振り返り

モデル作文を使うことで、児童は「立ち戻りシート」の使い方を習得するとともに、客観的表現、文学的・感情的表現の両面においての文章の工夫の視点を持ち、表現の仕方の選択肢を増すことができた。

### イ 各自の作文の吟味・工夫

モデル作文での学習を経て、各自の作文の吟味・工夫を行った。典型的な例として児童d（プレテストB評価からポストテストA評価）の作文を挙げる。この作文は、次年度入学してくるたった一人の新入生の保護者に向けて、小学校の学習について紹介するものである。児童dも他の児童と同じように、記述直後の自分での見直しは、漢字の直しのみであった。モデル作文を使った授業を経て、自分の作文について記入した「立ち戻りシート」を図5に示す。

図5 児童dの「立ち戻りシート」

「推敲」の過程に入る前の段階でも、目的や相手を想定して学習をしてきたが、このシートで改めて自分のテーマに関わらせて書き表し方を確認した。児童dは、相手の状況について改めて細かく分析し、新入生の保護者にとって必要な情報を考え、工夫する部分を記入し、さらにその工夫が目的や相手に合致しているのかを矢印で確認していた。「立ち戻りシート」の分析を踏まえて見直した作文には試行錯誤

の跡が見られる（図6）。

図6 授業を経た後の児童dの見直し

客観的表現の面では、順序を整え、相手に合わせた言葉遣いに直すなどの工夫、文学的・感情的表現の面では、保護者の不安を押し量り安心できるように励ましの言葉を加筆するという工夫が見られる。さらに児童dは、交流での友だちからの助言を踏まえて加筆修正を繰り返しながら作品を仕上げた。

保護者向けの紹介文を書いた後、それを基に同じテーマで新入生向けに書き換えさせたところ、どの児童も文末表現や言葉遣いなどの書き換えや内容の加除等を行っており、新入生に分かるような書き表し方になるように工夫していた。

これらのことから、「推敲」の過程において、「立ち戻りシート」を活用し、モデル作文で学習したことが、児童に文章を工夫するための視点と方法を獲得させることにつながったと考える。学習活動全体を振り返る最終段階である「推敲」の過程でこのシートを活用したことが、単元導入時だけでなく、単元全体を通して児童が目的や相手を意識して活動に取り組むためにも、有効であったと考える。「立ち戻りシート」に関する児童の記述を下に示す。

- ・最初は間違い字だけを直していたけど、シートを使うと「あれ、おかしいな」と思い、何度も直しました。相手のことを考えたらいいいものになりました。
- ・最初は漢字しか直さなかったけど、「立ち戻りシート」を使って見直すと、相手が安心して入学できるように工夫ができて、本当にいい文章になりました。新入生もきっと安心して学校生活が送れると思います。相手に喜んでもらえるようにがんばったかがありました。

#### 「立ち戻りシート」に関する児童の記述

### ウ 「立ち戻りシート」を活用した交流

モデル作文で整理した工夫の視点を基に、各自の

作文を見直し、特に工夫したい部分を表明させ、アイデアを出し合った。「立ち戻りシート」を使ったことで話し合うことが明確になったため、あら探しにならず、「掃除の仕方は上級生が教えるから大丈夫だと書くと、保護者の人に安心してもらえると思うよ。」「この書き方は新入生向けだから、こう直すと保護者向けになるよ。」など、目的や相手、工夫したい所に焦点化した交流になり、多くの児童が作文に生かしていた。授業後の振り返りを示す。

- ・作文の見直しで、工夫したい所を、○君がアドバイスしてくれたのでとても助かりました。清書もがんばります。
  - ・今日、自分が書いた文章についてみんなに教えてもらってうれしかったし、よりいい文章になってよかったです。

#### 授業後の児童の振り返り

意図を踏まえた助言をもらうことで、児童は、文章がよくなっていく実感とともに、相手のために、もっとよくしたいという意欲も高まったと考える。

### (2) 表現するための語彙を広げる学習について

授業と並行して、毎日の帯時間で語彙を広げる学習を行った。言葉集めや文の書き換え、擬音語・擬態語を使ったクイズ、読み聞かせや類義語辞典の紹介をし、詳しく表現したり、ぴったりの表現にしたりするために使えるような語彙を意図的に示した。学習の中で児童から出てきた語彙は掲示し、いつでも振り返ることができるようにした。掲示の中の言葉を自分の文章に使ってみては、「何か違う」と試行錯誤しながら言葉を選ぶことが自然に行われ、多くの児童が「擬音語・擬態語」「言い換え」「比喻」を、気持ちや様子を表すために積極的に使い、書き表し方を工夫していた。児童は書くテーマにおいて使うであろう語彙に触れ、試行錯誤する中で、使える語彙としての定着が図られたと考えられる。また、全員の作文に、心情の表現の工夫が見られたことから、今回のテーマでは、この取組が文学的・感情的表現の面において特に有効であったと考える。

## Ⅵ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

「書くこと」の学習過程において、「立ち戻りシート」を活用した学習や、語彙を広げる学習を行うことで「推敲」の過程の充実を図った指導は、目的や相手を意識して、書き表し方を吟味・工夫する力を高めることに効果的であることが分かった。

## 2 研究の課題

今回の単元が児童の意欲に大きく関わったと考える。そのため、今後も児童の思いに合致した単元開発に取り組む。また、今回開発した「立ち戻りシート」を、各学年の推敲の指導事項に焦点化しながら改善し、他学年でも活用できるようにする。さらに、国語科で習得した、書き表し方を吟味・工夫する力を、他教科・領域でどのように活用できるかを考えていく。

### 【注】

- (1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』東洋館出版社p. 102に詳しい。
- (2) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 32に詳しい。
- (3) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 102に詳しい。
- (4) 木下美和子（2005）：『「伝え合う力」を育てる国語科授業の創造』明治図書p. 27に詳しい。
- (5) 難波博孝（2006）：『楽しく論理力が育つ国語科授業づくり』明治図書pp. 15-20に詳しい。
- (6) 鈴木隆司（2015）：『小学校国語科における作文の授業開発（文章スケッチ）の授業実践を通して』和光大学現代人間学部紀要第8号育課程企画特別部会p. 201に詳しい。
- (7) 田中宏幸（2001）：大槻和夫編集『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書p. 198に詳しい。
- (8) 大内善一（2009）：田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典第四版』教育出版p. 132に詳しい。
- (9) 森田香緒里（2015）：高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春『国語科重要用語事典』明治図書p. 96に詳しい。
- (10) 青木伸生（2016）：『ゼロから学べる小学校国語科授業づくり』明治図書p. 3に詳しい。
- (11) 岩間正則（2010）：『中学生の『記述力』を育てる6つの要素』明治図書p. 33に詳しい。
- (12) 森田香緒里（2015）：前掲書p. 96に詳しい。
- (13) 小林一貴（2015）：高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編著『国語科重要用語事典』明治図書p. 95に詳しい。
- (14) 井上一郎（2006）：『誰もが付けたい説明力』明治図書p. 138に詳しい。

### 【引用文献】

- 1) 教育課程企画特別部会（平成27年）：『論点整理』p. 8
- 2) 文部科学省国立教育政策研究所（令和元年）：『平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書（概要）』p. 3
- 3) 村上ひとみ（平成4年）：石井佐久馬編集「記述に繋がる効果的な取材活動をどうすればよいか」『情報時代に生きる作文指導はいま』東洋館出版社p. 49
- 4) 村上ひとみ（平成4年）：前掲書p. 51
- 5) 岸本憲一良（2013）：中洲正堯監修『「新たな学び」を支える国語の授業 上 思考力・判断力・表現力の育成を旨として』三省堂p. 23
- 6) 阿部昇（2009）：田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典第四版』教育出版p. 107
- 7) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 33
- 8) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 34
- 9) 宮下昭廣（1990）：原榮一監修『小学校国語分かる授業のポイント表現①』教育企画出版株式会社p. 14
- 10) 大内善一（2009）：前掲書p. 132
- 11) 石丸憲一（2013）：中洲正堯監修『「新たな学び」を支える国語の授業 上 思考力・判断力・表現力の育成を旨として』三省堂 p. 17
- 12) 岸本憲一良（2013）：前掲書p. 26
- 13) 大内善一（2009）：前掲書p. 133
- 14) 石井佐久馬（1987）：『作文教材でなにをどう学ばせるか』東洋館出版社p. 12
- 15) 森田信義（1981）：野地潤家編著『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書p. 173
- 16) 高津忠行（1986）：『国語科授業の新展開 文章表現のつまずきの分析と治療指導』明治図書p. 174